

SGHでは校内で講演会や発表会を頻繁に実施してきました。講演はたいていの場合、「一方通行の一斉授業」です。この形にもこの形なりの味はありますが、質疑応答が盛り上がると満足度が高くなります。良い質問によって一気に会場（発表者含）の理解が深まるのですね。先日の講演会でも非常に興味深い御質問がいくつもあったのですが、十分なお答えができなかったのが心残りでした。そこで西岡先生にお願いして紙上でQ&Aを試みました。小笠原

Q & A

11.28E.FORUM講演会より

- 教育目標と評価
- パフォーマンス評価
- 課題研究・卒業研究などにおける指導
- カリキュラム・マネジメント、校内体制の構築、教師の共通理解など

●教育目標と評価

Q. AI技術等の発展により、英語(英語以外でも)での会話が機械で無理なくできる時代になっていそうですが、「英語力」とはどのようにとらえていらっしゃるでしょうか？ またその「英語力」は何を指標に評価されているのでしょうか？

私は国語の教員ですが、「国語力とは何か」という問には答えられそうにありません。無数の段階や側面があって境界領域がぼやけているクラウドのようなイメージを持っています。評価はその時々々の焦点で行うもので、包括的にはできません。基礎的知識理解も決してたやすく達成できないことは骨身にしみています。

さてその国語力の中に古文や漢文を読む力があり、長年必要性をとりざたされています。古典の力もまたいろんな側面がありますが、言葉を細密に分析していくと筆者の人間性が見えたり社会背景が感じられたりします。構文や用語は思考の枠組や文化的蓄積を語ります(だから細密に読み深められる力は必須で、「親しむ」だけだともったいないと思っています)。こうした特徴は日常言語でない古典だからこそ気づきやすく、そこでの気づきから跳ね返って日常言語への認識も深まります。古文や漢文は自文化であると同時に異文化ですが、文化のメタ認知に役立つのが大きな教育的価値だと思います。

おそらく同様のことが英語にも言え、英語は自分で新しく話さえるのですから古文漢文以上に言語＝文化＝自己を見せてくれるでしょう。いわゆる「使える英語」程度のことなら将来AIに任せても、知的な主体に語学は必須だと思います。

もちろん現状の技術的達成度では、海外研修に必要なのは使える英語力です。オーストラリアで現地の先生としたい話もできずに、何度曖昧に笑っていたことか。

●教育目標と評価

Q. 生徒の「創造力」について、どのようにとらえ、評価していらっしゃいますか？ 例えばどのような場面で、この子は創造力伸びたなあと感じられていますでしょうか？ 具体的なシーンがあれば教えてください。74のスライドの表で、「創造力」が伸びたと自己評価させていらっしゃいますが、生徒は「創造力」をどのようにとらえていますでしょうか？ 具体的な説明や定義はされていますか？

- 生徒には「調べ学習で終わらないこと」を求めており、そこから半歩でも先に進んでいけば「創造」とします。例えば「全国の読書傾向のデータがある→本校で調べてみた」が一番単純な形です。こんなささやかな一歩から「なぜか」などと自ら問い直し、面白い研究に発展した場合、「創造的だった」と感じます。何度深まるか、方向が変わるかを見ています。もっとも、能力としての「創造力」の定義は別にあります。
- 人間がゼロから新しいものを創造するのは不可能です。創造力の正体は既成の知見を複数結合することであり、知見同士の遠近や個数によって「焼き直し」と軽んじられたり「独創的な発明」と驚かれたりしますが、応用と創造がどこで分かれるかに明確な線引きはできません。その一方で、単に「調べてわかった」こととは区別できます。従って成績評価を行うなら創造力はYES/NO程度で示すのが説明責任に耐えるし、授業中の目標としては「より面白いもの」を目指して天井知らずの設定になります。

●教育目標と評価

Q. 広島高校では評価をどう指導改善に役立てましたか？

- 今では遠い昔に感じますが、SGHで最も戸惑ったのはコンピテンシー（資質・能力）ベースの学びにすることでした。6つのコンピテンシーを設定したものの、これの育成状況をどう測ればよいのか、よくわかりませんでした。単元ごとにまとめのアンケートは取りましたが、自己をどう評価するかは個人の性格によっても差が出ますし、勉強するほど逆に自分の至らなさに気づいて自己評価が低くなる現象も起こります。SGH校が口をそろえて言ったのは、「自己評価は一度下がる。その後上がってきたら本物」ということです。
- SGHではコンピテンシーで成績をつけていません。またSGHの評価指標の中には、個人評価に使えないものもあります。例えば「将来海外に出たいと思う生徒が増える」ことは、学校全体の傾向を示しますが、（そして地元地域でもグローバルな活動はできるというのが広島高校の考えですが）海外生活の可否は個人の自由です。個人を伸ばすための評価と学校を変えるための評価は区別します。
- 生徒アンケートは、授業改善には有効でした。全体傾向がどうかは、授業の良し悪しをある程度語ります。もちろん「インスタントラーメンを初めて食べて感動している」だけなのかもしれません。生徒が満足しているからよしではなく、もっとおいしいものを出す責任は教員側にあります。

●教育目標と評価

Q. スライド10で「喜んでもらえたかで評価」ともすれば、成果主義になってしまわないかなと疑問に思いましたが、一人ひとりの成長過程はどのように評価されていらっしゃるのでしょうか。評価はつけていらっしゃいますか？

教員が生徒を評価するという意味ではありません。10グループくらいが同時進行するので観察さえ満足にできません。でも生徒の自己評価はあります（日の最後にアンケートしますが、その場では聞かないので、まずは心内にあります）。相手に喜んでもらえたかということは、異文化交流の基礎では大事なポイントです。自己満足ではいけないのです。相手の内心をうかがうのだから本当のところはわかりませんが、ここでは自分がどう思えたかでよいのです。

自分としての評価が良かれ悪しかれ、この時の「評価」を次に生かすことが大切です。次とは自身の海外研修であり、次年度のファシリテート（後輩の夏季集中講座を支援する）です。

「良かれ悪しかれ」とは書きましたが、こんな、相手のある活動では全体の失敗は好ましくありません（個人がどうだったかということでは反省だらけのはずですが）。気持ちよく始めたい1日の最初のプログラムです。グループ編成で英語力やリーダーシップなどは考慮しています。スクールツアーという事自体がある程度以上の面白さを保証しますから、たいがい成功します。

ブレイクタイム

「こんな文字ばかりだと読んでもらえないな」
と教員感覚がアラームを鳴らすので、ちょっと一息

オーストラリア研修の行程を委託した旅行業者の方が、「オーストラリアまで行ってカンガルーも見ないなんて」と言って差し込んでくれた動物園見学。「研修だからと固く考えすぎていたな」と反省しました。



●パフォーマンス評価

Q. パフォーマンス評価がグラデーションとは、どういう意味ですか？

京大の溝上先生がアクティブラーニングを、教え込みの一斉授業以外の全ての授業で、ただし自分がどう学んでいるかの自覚を含むもの（このあたりは私の記憶の中で変形しているかも）と定義なさって、大小いろいろあってよい。それが「使いこなす」ことだと言っておられました。とても納得しました。

要は生徒に力をつけたいのだから、深いことだけやろうとするのももったいないのです。例えばペアワークはいくらでも高度な内容になり得ますが、単純な知識の確認のために使う場面があってもよいはずですが。深みを知らずただ話をさせればよいと思うのはまずいですが、意図的にやるなら、質を追求するペアワークと、割り切って活動量を増やすペアワークを使い分けられる方が授業の幅が広がります。

パフォーマンス課題の場合はそもそも多種多様ですし、総合的な探求の時間では社会的課題や自分を問う、教科に分類できないものを扱える一方で、教科ではその教科らしさを忘れるわけにはいきません。単元のまとめとして行うことも多いです。その結果、フルスペックのパフォーマンス評価から従来型の授業まで、いろいろなやり方が混在しているのが今の教室だと思います。これを「グラデーション」と表現しました。それを分かった上で使いこなしているなら、多様であることに積極的な意義があると思います。

また、カリキュラム全体としてパフォーマンス評価の考え方が背景にあるなら、「後の〇〇につなげるために、この単元は知識技能が中心だ」という授業もパフォーマンス評価に向けた大単元の一部という捉え方ができます。

これは冗談ですが、すべての授業は「何%パフォーマンス評価か」で表すことができるのではないのでしょうか。割合が最低の授業でも0ということはなさそうです。もちろん「この条件を満たさないものは神戸牛ではない」という説明も正しいわけで、「すべての牛は神戸牛である」というのは暴論かもしれません。

●課題研究・卒業研究などにおける指導

Q. 卒業研究の研究テーマを設定させるまでの過程について教えてください。自らテーマを設定させるためのゼミのような活動があるのでしょうか？

研究テーマの設定には長い道のりが必要です。「研究とは何か」が分かってないといけないし、そもそも「自分は何をしたいか」というのは人生の大テーマでさえあります（卒業研究にどれくらいものを背負わせるかは人それぞれですが）。大学生でも卒論のテーマを決めるのにずいぶん時間をかけており、3年かかるとも言えるでしょう。だから何度もアンケートを取りながら半年以上かけて、他の単元の裏側でテーマを探し続けます。ある時期だけで考えるのではなく、頭の片隅で考え続ける期間をもうけます。

研究を始めてからも変わります。先日も冬休み前最後の授業になって「すべてリセット」を決めた生徒がいましたが、よく学べていると思います。

直接的に研究テーマをテーマにする単元は2年の1学期にあります。研究分野別にグループを作り、その分野の先輩のテーマを見て、「どう研究計画を立てるか。もっとよいテーマ設定にならないか」を考える演習と、自分たちの仮テーマで同じことをやる演習です。SGH以前に、あまりにもテーマ設定が下手なことに腹を立て、大きすぎるテーマや曖昧なテーマを選んで「このテーマで研究できるか批判する」演習を実施したことがあります。欠点の指摘はできても、それが自分の研究の構築には結び付きませんでした。そこで構想の立案そのものを焦点にしたのがこの単元です。

高3の6月に卒業研究中間発表会があり、高1高2も聴衆になるのですが、高2の教室を会場にする発表では「研究方法のレクチャー」も発表内容の一つにしています。こういうイベントもジワジワ効いていると思いますが、やっぱり自分で悩むことが必要で、教えられてすぐできはしません。

高2の夏に大学院訪問を選んだ生徒は、院生から研究について指導を受け、基本文献なども紹介されます。先行研究などを読み込んでテーマを詰めていくのも一つの方法です。

●課題研究・卒業研究などにおける指導

Q. 個人研究をする場合、生徒1人ひとりが多種多様なテーマを設定しますが、全ての生徒の学びを深いものにするために、何か工夫されていたことはあるでしょうか？

1クラスをTTで持つと、教員1人あたり20人程度の生徒を担当することになります。面談は50分に5人がせいぜいで、込み入った話になると2人で終わったりします。1単位の授業なので、生徒からすれば先生と月に1度10分程度話をするようになります。これでは「教える」ことは難しいですね。個人研究を選ばない学校はおそらく「教えられない」と考えていて、それはまったく正しいのです。

本校の卒業研究は「自分で研究すること」が目的です。教え込めなくても問題ありませんが、ほったらかしではうまくいきません。（非常によくできる生徒は、好きにさせることで最高のパフォーマンスを示します。ただし指導するとさらによくなります）

1. 生徒が自分で参照できるガイドを示す
 - a 先輩の卒業研究と、そのマニュアル
 - b 教員が作成したパワーポイントのシート構成と注釈
 - c 研究などを解説した副読本
2. 生徒同士の学び合いを奨励する
3. 評価と仕切り直しの機会を複数用意する などしています。

ブレイクタイム

オーストラリア研修の一コマから
クイーンズランド大学生協の掲示。「防犯カメラ作動中」
の表現コンテストができるなあと思いながら撮りました。



●課題研究・卒業研究などにおける指導

Q. 全ての生徒が意欲的なわけではないし、積極的な態度ではないかもしれません。そのことについてどのような課題意識をお持ちでしょうか？

そこが最も難しいところです。「主体的な学び」をどうやってさせるかというパラドックスです。クリアする実践上の方略は、次のシートのものも含めていくつかありますが、ここでは授業以前のことを書きます。

「生徒が自分で課題発見・解決できるようにすること」は教育の最終目標の一つだと思います。意欲的な生徒は勝手にやってくれる（質や方向性の問題はあります）のだから、教員の役割は主に積極的でない生徒のためにあります。

大学で教育原理を学んだ際に、「生徒は教員の3分の1しか面白くないから、まず自分が授業を面白がること」と教わりました。まず教員集団が面白味を共通認識できることが大切です。教員にそう感じさせるには魅力的な生徒の姿を示すと説得力がありますから、中間発表会の参観を求めます。「あの生徒にこんな姿があったなんて！」という驚きがいろんな先生から聞こえてきます。運動会や文化祭でも同じ現象がありますよね。学校に別種のパフォーマンスの場が増えて、そこで輝く生徒がいるということです。

生徒個人の内発的な動きが鈍い場合、集団の力を使うのも一つの方法です。広島高校の卒業研究がやがて伝統になれば、それがあることを前提に入学してきたり、誇りにさえするかもしれません。今は大きなイベントごとに「総合的な探究の時間通信」を出して、良い感想を共有するなどして、意識を高めようとしています。

●課題研究・卒業研究などにおける指導

Q. 生徒の意欲の問題も言及されていたかと思いますが、やる気のない生徒に対する効果的な働きかけなどはありませんでしょうか？

以前「やる気」の研究をした生徒がいました。その生徒によればやる気が出るのは2つの場合だそうです。

①そのこと自体が面白い時

②それをやることで何らかの利益が得られると分かっている時

①は趣味や娯楽，②は受験勉強などでしょうか。他にもありそうですが，とりあえずこの2つで考えると①も②も「どういう課題がその生徒に合うかは人それぞれである」ということになり，個人の自由研究が最も意欲を向上させる学習形態と言えそうです。

やる気のない生徒に①でアプローチすると，興味のあるようなことをいかに「研究」として成り立たせるかということになります。ゲームでも芸能人でも深い研究になり得ますが，実は単に面白いだけでなくこれが意義のある学びであるという感覚がないと生徒は納得しません。

②の場合は功利的ですから，一応の納得は得やすいです。広島高校は大学受験において推薦入試を中心にしませんから，直接的に卒業研究がポートフォリオの一部や面接の話題として使える生徒は多くありませんが，自分の志望している学問分野への知見を深めることは「損のないこと」です。しかしこの場合も研究自体に面白さがないと辛いです。

結局①と②は同時に満たす必要があります。真剣に深めていけば研究は面白いのですが，最初は迷いの時期なので②を入りに①を味わうように支援することが多いです。

●課題研究・卒業研究などにおける指導

Q. 先輩が後輩にマニュアルを作る(課題研究, 海外研修)取り組みが, 興味深かったです。先輩と後輩が(イベント以外で)カリキュラムの上で一緒に何かに取り組むことはありますか? あるとすれば, それはどのような場面ですか?

卒業研究中間発表会や複数学年の参加する講演会では一緒に質疑応答をするし, 1年生の留学生対話では高2生が授業の設計と司会, ファシリテーターを担当しました(日常的に海外から来校するようになったのでSGH終了で単元としても終了)。これらはイベントですか。

全くの日頃の授業では先輩の卒業研究やマニュアルをデジタルで参照しているくらいです。高3の2月3月(広島高校では3年生も3月中旬まで授業があるのです)に, 進路の決まった高3生の希望者で下級生の相談員をしてもらう計画をしていますが, まだ決定に至っていません。

卒業研究中間発表会での, 後輩への研究方法のレクチャーをヒントに, 上級生が下級生に教科学習や学習方法を教える会も発想されています。「人に教えること」は教えた人に大きなメリットがありますから, 学力向上の仕掛けとしてよさそうです。

●カリキュラム・マネジメント、校内体制の構築、教師の共通理解など

Q. 課題研究でカリキュラム・マネジメントをしていく上で、中高一貫校としての課題があれば教えてください。

中と高はもっと密接につながればよいのですが、あまりに一体化すると高校から入ってくる生徒が苦しくもなります（中学は4クラス，高校は6クラス）。中学校は教科「ことば科」を軸に論理的思考力とコミュニケーション能力を育てています。高校がこの恩恵を受けていることは間違いありません。考えることや表現することを苦しめない生徒たちですから、何をしてもやりやすいし，高校から入った生徒もその雰囲気の中で動きます。そもそも，さまざまな場面で活用できる基本的な能力を育てているわけですから，つながりを意識するまでもなく力を使えます。高校でやっていることも同じです。卒業研究は大学での卒論を先取りするためにやっているのではなく能力や態度を育てたいのです。

さて，以下は私の感触です。中学と高校で世界観が繋がらない部分があります。繋がらないのがよい所だと思います。中学は唯一の答えや正しさのある世界で，高校は複数解で相対的な世界です（もちろん中学でも多角的にものを見ることや人の立場に立つことを重視しますし，高校でもよりよいことを考えますが）。混沌として一筋縄ではいかない現実社会が近くなるにつれて，要求されるリアリティラインが違ってくるのでしょうか。高校でとらえる社会の方が中学のそれよりリアルですが，中学で高校と同じ見方をすべきだとは思いません。小学校はもっと違ってよいはずです。大学は高校よりずっとリアルでなければなりません。

そうすると，中学から高校に入学した際に世界観のギャップが生じます。生活面でも，同じ行動をした際に中学と高校でOKだったりNGだったりして，ときどき保護者から苦情がきたりしますが，高校生に中学生と同じ身の処し方を要求するのともどうかと思います。「一連のもののように実はジャンプがある」ことを納得させなければならぬのが中高一貫校の難しさの一つです。

●カリキュラム・マネジメント、校内体制の構築、教師の共通理解など

Q. SGHの実践について、広大や山大、海外の学校といった外部機関との連携がありました。それは具体的にどのような経緯で実現したのでしょうか？

何かをするときには自分で全部やるのではなく、できる人に頼る方が合理的な場合があります。SGHの場合「管理機関」として教育委員会が指導するので、海外交流系の研修先や現地校は県がセッティングしてくれました。海外研修などのワケガワカラナイ分野はプロに頼るべきだと思います。そもそもそういう仕事をするための部署なので遠慮はいりません。

行政や企業にも、高校生（などの一般住民）に自分たちの取組を紹介する部署がありますから、話は持っていくやすいです。生徒の反応などで「やってよかった」手ごたえが得られると次年度以降がスムーズになります。

山口大学は国際総合科学部の新設の際に、広報の方が説明に来られました。その際に説明してくださった「デザイン思考」の考え方が、卒業研究の方法論として使えそうだったので、講演を依頼しました。初期は学部新設の紹介とセットの講演で、双方に利益のある形でした。進路指導室の来客対応では面白そうな話がたくさん聞けます。県立広島大学（叡啓大学）の「宮島学」や県内あちこちの「平和学」ともいつかコラボしたいと考えています。

●カリキュラム・マネジメント、校内体制の構築、教師の共通理解など

Q. SSH、SGHだからこそ得られるリソースがあるわけですが、リソースの獲得が容易ではない学校へのアドバイスをお願いいたします。

SGHの指定を受けて、ゼロから海外研修を企画・実施するのは大変でした。しかし、それと同時期に広島県や外部団体が主催する海外研修が多数始まり、学校が単独で企画する意味があるのか複雑な思いがしました（そこでますます外部では出来ない研修を目指しましたがそれはまた別の話です）。もちろん外部のツアーの場合、内容が思い通りにはならないわけですが、それはツアーのプログラムとは別に校内で課題設定して、長期のカリキュラムデザインに組み込めばよいのです。海外研修は修学旅行でない限り、一部参加者の経験に留まります。その成果を全体に還元しないともったいないですが、還元の仕掛けは、ツアーの主催がどこでもあまり変わらないはずです。

卒業研究などの授業改善は計画と運用にエネルギーを必要としますが、お金はあまりかかりません。外部講師を多数招く必要もないし、何より核心はカリキュラムと授業の実践ですから、追加予算は発生しません。この分野の元祖であり、それこそ教育条件から変えてみせたのが堀川高校で、本当に堀川高校が成し遂げていることには頭が下がりますが、広島高校はいかに安価に負担を少なく中身を豊かにできるかに挑戦しました。そうでないとみんなができるものにならないと思ったからです。やってみると……やっぱり大変でしたが、とりあえず広島高校程度のことのできるノウハウはこうして公開していますから、次の学校はもう少し楽に同じ地点に立てるのではないかと思います。いいところ取りをしてさらに楽にそれぞれの学校の目標を達成してください。

ブレイクタイム

オーストラリア研修の一コマから

休みに本屋や図書館を巡りました。なんと全てに日本のマンガコーナーがあってびっくり。ブリスベン近郊の高校では外国語として日本語の授業が人気だと言っていました。そういう高校とコラボするのは、先方の利益になってニーズがあるかもしれません。



高校の図書館



地域の図書館

●カリキュラム・マネジメント、校内体制の構築、教師の共通理解など

Q. 教科学習も課題解決のための知識・技能の習得の場であるという認識は校内で共有されているのでしょうか？ とすれば、方法論の確立していない探究学習vs方法論の確立している教科学習という構図が生じて、探究学習がお荷物視されがちなのですが、広島高校ではどうやって意識の共有が図れているのですか？

各教科で最も基礎的な覚えこみやドリルもそのこと自体が目的でなく、その教科なりの見方考え方を使いこなせるためのステップです。卒業研究において生徒が発揮しているのは何らかの教科（たち）を主体的に使えた姿です。これらの認識は、おそらく広島高校のほとんどの教員が持っているでしょう。しかし、それをまとまった形で言語化しているかは人それぞれですし、もちろんそもそも「そういう見方もできる」という話です。それはともかく、教科と探究を分離してしまうのは、両方の学習効果を下げるので損だと思います。これは学習だけのことでなく、学校生活を関連のないバラバラのタスクとしてとらえるのはもったいない話です。

あ、共有の話でしたね。校内研修会で何かの側面を話題にすることもあります。まとまった形で教員が意識を共有できるのは指導案を通してです。生徒向けのレクチャーも、同じ室内にいる教員との共有の場です。SGHの初期では授業計画だけで必死で、教員間の意識の共有がうまくできてなかったのが悔やまれます。プランナーに全体が見えてないとできないので追いつかなくなりがちなのですが、授業をするのは個々の教員なので意識の共有は決定的に重要です。

●カリキュラム・マネジメント、校内体制の構築、教師の共通理解など
Q. 卒業研究への取り組みや教科横断型授業の展開、パフォーマンス評価など、現在の状況に至るまでに校内体制をどのように構築されたのでしょうか？ また、教員が共通理解を持つためにどのような工夫をされたのでしょうか？

日頃の通常運転だけで十分満腹感のある学校現場ですから、この上仕事を追加できないと皆が思うのも当然です。「やった方がよいこと」は無数にあるし、それらを片っ端からやろうとするのは間違いです。目に見える実利ないし危機がないと改革の機運は盛り上がりません。SGHの場合、文部科学省の指定事業なので、何をするにも校内の合意は得やすかったです。最初から「組織的な取組でなければならない」ことが明示されていたことも助かりました。これからの学校にとっては新学習指導要領の実施が大きなチャンスだと思います。

広島高校の場合、分掌と別に総合の担当者（各学年チーフ）が決まるという悪しき伝統があり、総合のチーフは2重の仕事をして大変でしたが、SGHでは専従にできました。また校外学習の地域を絞り込み、卒業研究は筋道をつけることで指導を楽にしました。海外研修などの新規の仕事量が増える半面、仕事量の軽減のためにもSGHを使用しました。

共通理解については前のシートに書きました。年次報告書などを配ってもどの程度読み込んでもらえるかは不明です。教員は生徒の目に触れるものなら本気で読むので、生徒向けのものを媒介にするのがよいと思います。

●カリキュラム・マネジメント、校内体制の構築、教師の共通理解など

Q. 現在の教職課程では基本的に自分が取得する科目の教育法しか履修しないので、教科横断的学習を回していくのは現場の先生にとってはかなり大変なものなのではないかと思います。その「教科横断的」な学びをどのように学校の先生方で回していったのでしょうか。コマ数の割り方や先生方の連携方法という観点で教えていただきたいです。

広島高校の場合、イベントを念頭において授業を動かしてもらったり、テーマをコラボしてもらおう程度のことで、通常の授業に他の教科が入ってくる形の教科横断ではありません。教科はその教科の知識・技能をつけ、総合するのは総合的な探求の時間で行うという設定です。1年生の総合は学年を一斉展開したTTを行います。これはむしろ教員の専門分野で分けるためです。

継続的な合教科の授業を行うには持ち時間数から考える必要があります。SGHの初期に私が訪問した範囲で言うと、富山中部高校さんが、ベースの教科と加わる教科の相性があると言っておられました。社会の授業にゲストで理科が入るのはよいが、その逆はうまくいかないとのこと。去年は広島国泰寺高校さんから、1つの社会的課題を考える際に理科的な解法と社会的な解法が食い違い、合意が難しいとも聞きました。むしろ違いを見せる目的でやると教科ごとの見方・考え方を明らかにできるかもしれません。

●卒業研究の指導について

Q. 卒業研究は高校時代に経験しなかったし、大学でも卒論は書いていません。私にも指導できるでしょうか。

【もちろん指導できます】高校における卒業研究は学術論文の作成そのものではなく、論理的に考察を進め、課題発見・解決する態度を身につけるためのものです。これはすべての教科の根本にあるものですから、ある程度までは全ての教員が指導できるし、教科の専門性に深くかかわることは自分の教科でないとはできません。ここはカリマネの出番です。

【指導する必要はありません】卒業研究の目的は「教えられた通りやる」ことではなく「自分で考える」ことです。指導者はむしろ教え込んではいけないで、「なぜ・どうして」を問うて、生徒の考えを先に進める支援を（必要な場合だけ）すればよいのです。論理的に問うことは誰にでもできます。

【指導には奥があります】誰でも簡単にできることは底が浅い、やりがいのないことです。卒業研究の指導は上記のように、教員になるだけの資質・能力がある人なら誰でもある程度までならできますが、どこまで深くできるかは人により、経験と課題意識によっても違ってきます。これは、全ての教科の指導と同じです。誰でも自分の教科を教えています、同じように教えているのではありません。それはこの仕事の奥深さの一つです。生徒に「自由に」させるだけではたいしたものにならなくて、指導がいるということも同じです。